

# 「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

——流通手段の前貸と貨幣資本の前貸——

名 和 隆 央

## 序節

第一節 『剰余価値学説史』第六章における流通手段の前貸の規定

第二節 『資本論』第二部第三篇における貨幣の還流法則

第三節 社会的再生産における独自の貨幣資本の前貸

## 序節

「再生産論」における貨幣の前貸と還流についての説明は、従来から論議されている銀行による前貸の流通手段前貸と資本前貸との区別にかんする基準を明らかにする点に、一つの意義をもっている。この点を明らかにすることは、資本主義的生産における銀行の役割、銀行の貸出と通貨量との関連、および銀行による資本前貸と物価騰貴との関係などの理解の一つの基礎をなすであろう。

ところで、『資本論』第三部第三章の一節では、流通手段

「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

の前貸と資本の前貸との区別は現実の再生産過程においてもともよくあらわれているとのべられているが、この叙述の解釈にかんして、かねてより二つの対立する見解がある。一方は、社会的再生産の見地からすれば、銀行の前貸しするものはすべて流通手段であるという見解であり、<sup>(2)</sup>他方は、社会的再生産における流通手段の前貸とは、商品資本の流通の媒介のために追加的に貨幣を前貸しすることであり、このような流通手段の前貸は現実には貨幣が生産過程に投下される資本の前貸とは区別される、<sup>(3)</sup>という見解である。わたくしは、後者の見解を支持するのであるが、しかしなおその見解には補足され深められるべき点が残されていると考えている。

第一に、『資本論』第三部の草稿は現行版『資本論』第二部第三篇の草稿よりもさきに書かれており、<sup>(4)</sup>先述の第三部の一節の解釈のためには第三部の草稿よりもさきに書かれた草稿にも

とづいて考察し、そのうえで現行版第二部第三篇をみるほうがより正確を期することができるとおもわれる。またそれだけではなく、マルクスがこの問題についてはじめて正面から論じたのは『剰余価値学説史』第六章「余論 ケネーによる経済表」においてであるが、そこでのマルクスの把握を浮き彫りして置き、そのうえで第二部第三篇における到達点をとらえることは、彼の見解の発展を明らかにすることになり、その点で問題の理解を深める一助となるであろう。

第二に、社会的再生産における固定資本の補填および資本蓄積のさいの貨幣前貸の契機をどのように考えるべきか、という問題がある。というのは、そのさいの貨幣の前貸は「資本の前貸」であろうが、やはり社会的生産物の流通に必要な流通手段を供給しており、社会的再生産の見地からすれば、「資本の前貸」も流通手段の前貸にすぎない、という見解がみられるからである<sup>(5)</sup>。かかる見解はわれわれの見解とは異なるとはいえ、流通手段の前貸と資本の前貸との区別に関連して、社会的再生産における固定資本の補填および資本蓄積のさいの貨幣の役割をどう考えるべきか、一つの問題を提起したといえる。

以上の二点の考察が本稿の課題をなしている。現在でも、社会的再生産における貨幣の前貸と還流の独自の内容についての考察が少なく、一般にあまりこの問題が理解されていないようにおもわれる。右の二点の考察を通じて、この問題への理解を少しでも深めることができれば本稿の目的は達せられる。

なお流通手段の前貸と資本の前貸との区別については、「再生産論」における区別を明らかにするだけではなく、そこでの区別と第三部第五篇におけるさまざまな視点からの区別との関連を明らかにしなければならぬであろうが、本稿では課題を流通手段の前貸と資本の前貸との区別がどのように現実の再生産過程にあらわれているか、に限定しておく。また、「再生産論」の発展史の視角からの考察も、「余論 ケネーによる経済表」と第二部第三篇とにおける貨幣の還流運動の関連に絞り、そのくわしい考察は後日にゆずることにする。

(一) Das Kapital. Marx-Engels Werke 25. s. 546-547. 以下『資本論』はKと略記し、原書ページを示す。邦訳は大月書店『マルクス・エンゲルス全集』を使用する。ただし多少訂正したばあいがある。

(二) 三宅義夫「いわゆる貨幣の前貸と資本の前貸の問題」(『立教経済学研究』第七卷一—二号に所載、のちに『貨幣信用論研究』一九五六年に所載)。

(三) 久留間健「流通手段の前貸と資本の前貸」(『立教経済学研究』第二〇巻第二—四号、一九六六—六七年、所載)。

(四) 第三部の草稿は、一八六五年に書かれたのにたいし、第二部第三篇の草稿は、第二稿が一八七〇年、第八稿が一八八〇—八一年に書かれたと考えられている。第二部のエンゲルスの序文参照。第三部用草稿の執筆時期の考証は、佐藤金三郎「『資本論』第三部草稿について(一)」(『思想』No. 56. 一九七一年)にくわしい。第二部草稿については、ハリトノフ論文の紹介、副島種典「マルクス『資

本論』第二巻について」(『経済評論』一九五七年四月号)、およびグリゴリヤン論文の紹介を含む、田中真晴「晩年のマルクス覚え書」(『経済叢書』第一〇九巻第一号、一九七二年)が参考になる。

(5) 松本久雄「資本の前貸と貨幣の前貸との区別について(上)」(『証券経済』第九八号、一九六七年一〇月、所載)。

## 第二節 『剰余価値学説史』第六章における 流通手段の前貸の規定

序節でのべたように、マルクスが第三部の草稿を書いたときには現行版『資本論』第二部第三篇の草稿(第二稿と第八稿)は存在していなかった。したがって、第三部第三三章の一節における「第二部第三篇(原文では第三章)の指示は、第三部用草稿の直前に書かれた第二部の第一稿」第三章「流通と再生産」を指すと考えられる。この第一稿以前にマルクスが社会的再生産における貨幣流通を叙述したのは、つぎの三つの文献である。

一、『経済学批判ノート』第一〇冊、「余論 ケネーによる経済表」

二、『経済学批判ノート』第一七―一八冊、「エピソード。資本主義的再生産における貨幣の還流運動」

三、『経済学批判ノート』第二二冊、マルクス自身による『経済表』

これらの文献のなかでマルクスの『経済表』は、第三部第一〇章に収める予定で書かれたものであり、またそこでの貨幣還

「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

流の説明は簡単なものである。「エピソード。資本主義的再生産における貨幣の還流運動」は未公開であるが、最近フィッシャーがその概要を紹介している。それによれば、「エピソード」は「余論 ケネーによる経済表」で残された問題に関連しており、そこでは、一、商人による再生産の媒介、二、剰余価値の実現、三、二大社会的部門間の交換と貨幣流通、四、貨幣資本の蓄積、等々の問題が叙述され、『資本論』第二部第十七章、第二〇章第五節とかなり一致した叙述がみられるとされている。マルクスは「余論 ケネーによる経済表」においてすでに社会的再生産における独自の貨幣還流と流通手段の前貸の規定について明らかにしており、この問題をふまえて「エピソード」において二部門間の交換と貨幣流通を叙述していると考えられる。そして、この「エピソード」をふまえて、第一稿が書かれている。資料上の制約のため目下のところ、両者の関連を考察するゆとりはない。ただ、この第一稿において流通手段前貸の基本規定が与えられ、それ以上のくわしい考察は、「エピソード」を含む第三部第一〇章にゆだねられているといえるであろう。すでにことわったように、本稿では考察の対象を「余論 ケネーによる経済表」と第二部第三篇とにおける貨幣の還流運動の内容および関連に限定する。

本節の課題は、「余論 ケネーによる経済表」を考察し、社会的再生産における貨幣の形式的な還流および流通手段の前貸の内容を明らかにすることである。

「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

(6) 第一稿は、ロシア語第二版『マルクス・エンゲルス著作集』第九卷、一九七四年に所載されている。

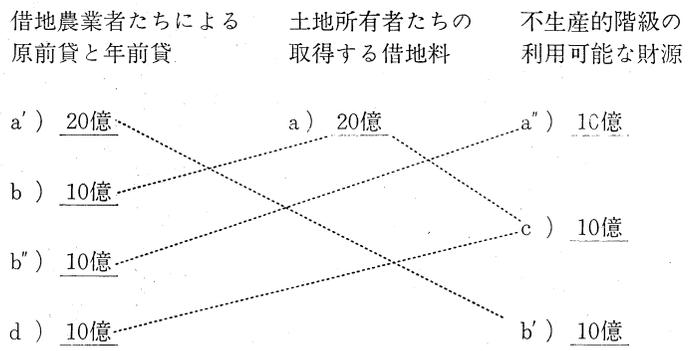
(7) マルクスは自分の『経済表』の説明のなかで「ぼくの表についていえば、これはぼくの本の最後の諸章のうちの一章のなかに総括として載せるものだ」とのべており（一八六三年、七月六日、マルクスのエンゲルス宛の書簡）、また一八六三年一月の『資本論』第三部のプラン草案には「一〇、資本主義的生産の総過程における貨幣の還流運動」という項目がある。

(8) B. Fischer, Zum Inhalt und Platz der „Episode, Refluxbewegungen des Geldes in der kapitalistischen Reproduktion“ in den Hefen XVII und XVIII des ökonomischen Manuscripts von 1861-1863, „.....unsere Partei einen Sieg erringen, Studien zur Entstehungs- und Wirkungs-geschichte des, Kapitals von Karl Marx“, 1978, s. 147-157 ナイシチャー論文の紹介がらぎの論文にある。小林賢斎『著積におけるIIcの転態』について（『武蔵大学論集』第二七卷第三・四号、一九七九年、所載）。

ケネーによる『経済表』では、貨幣流通は、商品流通および商品の再生産によって規定されるものとして、<sup>(9)</sup>事実上資本の流通過程によって規定されるものとして示されている。そのばあいの貨幣流通の独自な特質は、流通に前貸しされた貨幣が社会的再生産を媒介したのち出発点に還流することである。このような商品流通を媒介する貨幣の前貸と還流G—W—Gの内容をどのように理解するか一つ問題となる。なぜなら、商品流通を

ケネーによる『経済表』

年々の総生産物50億（リーブル・トゥールノア）



50億

20億、このうち半分が不生産階級に属する財源としてあとに残る。

媒介する貨幣の前貸と還流( $G-W-G$ )は、資本の前貸と還流( $G-W-G$ )と流通形態として一致しており、両者を混同する見解がみられるからである。だが、社会的再生産を媒介する貨幣の前貸と還流は、貨幣資本の循環と明確に区別されなければならない。

さしあたって、ケネーの『経済表』の説明からはじめよう。

いま現存しているものは、(1) 借地農業者の手もとにある二〇億の貨幣、(2) 五〇億の土地総生産物、(3) 二〇億の製造品である。社会全体で、二〇億の貨幣と七〇億の生産物。借地農業者ⅡF、地主ⅡP、製造業者・生産的階級ⅡSとする。

はじめに、FがPに二〇億の貨幣地代を支払う。Pは一〇億の貨幣でFから生活手段を買う( $a-b$ )。一〇億の貨幣がFに還流し、借地農業者の総生産物の $\frac{1}{5}$ が処分される。Pは残りの一〇億の貨幣でSから商品を買う( $a-c$ )。これによって、Sの総生産物の半分が処分される。この貨幣でSはFから生活手段を買う( $c-d$ )。こうして、借地農業者の総生産物の $\frac{2}{5}$ の $\frac{1}{5}$ が処分される。それと同時に、借地農業者はPとSに二〇億の生活手段を売ることによって二〇億の貨幣を流通からとりもどす。つぎにFは、彼の前貸の半分の補填するために一〇億の商品をSから買う( $a-b$ )。これによって、製造業者の総生産物の残りの半分が処分される。最後に、Sが一〇億の貨幣でFから原料を買う( $a-b$ )。かくして、借地農業者の総生産物の $\frac{3}{5}$ が処分されるとともに、一〇億の貨幣がFの手もとに

「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

還流する。まだ、土地総生産物の $\frac{2}{5}$ が残っているが、このうちの一方の $\frac{1}{5}$ は借地農業者の前貸の半分の補填し、残りの $\frac{1}{5}$ は借地農業者によって個人的に消費される。

以上で、社会的再生産がどのように行なわれ、貨幣がその過程をどのように媒介するか説明されたが、貨幣流通にかんし二つの点に注意すべきである。

第一に、貨幣流通は社会的再生産によって規定されており、資本の流通または収入の流通を媒介している。

第二に、Fの前貸した二〇億の貨幣は、社会的再生産を媒介したのち、Fの手もとに還流する。

第一の点について。地主による二〇億の貨幣の投下( $a-b$ 、 $a-c$ )は、個人的消費のための収入の支出をあらわしている。これに反して、製造業者および借地農業者による貨幣の投下( $c-d$ 、 $a-b$ 、 $a-b$ )は、生産的消費のための資本の前貸をあらわしている。たとえば、Pが一〇億の貨幣でFから生活手段を買えばいい、これはたんに収入が貨幣の形態から商品の形態に転化されることをあらわすにすぎない。これにたいして、FがSから製造品を買えばいい、これは彼の前貸の補填であり、資本の変態の第一段階をあらわしている。このように、貨幣を流通に投下する契機は、資本の前貸または収入の支出によって規定されているのである。

第二の点について。Fの前貸した二〇億の貨幣は、全取引が終わればFの手もとに還流するが、社会的再生産の媒介に必

要な貨幣の前貸と還流について、マルクスはつぎのように述べている。

「もしFが直接彼の生産物でPとSとに支払うとすると、彼は少しも貨幣を支出しないであろう。だから彼が貨幣を支出すれば、PとSとがそれをもってFの生産物を買ひ、その貨幣がFのもとに還流するのである。これは、買い手として全事業を開始しそして終結させる産業資本家の手もとへの、貨幣の形式的な還流である」<sup>(11)</sup>。

ケネーの『経済表』は、貨幣流通を考慮せずに、商品対商品の交換を前提しても社会的再生産の条件を説明しよう。ところが、もしFが貨幣を前貸しするとすれば、この貨幣は社会的再生産を媒介したのちFの手もとに還流する。マルクスは、このようならばあいの貨幣の還流を「貨幣の形式的な還流」と規定している。しかし、貨幣の還流は貨幣が資本として前貸しされたばかりにも生じる。したがって、「貨幣の形式的な還流」と貨幣の資本としての還流とはどこに相違点があるのか、問題となる。マルクスは、資本家と労働者とのあいだの取引を例にして、つぎのように「貨幣の形式的な還流」の意味を明らかにしている<sup>(12)</sup>。

資本家は、労働者に労賃を貨幣で支払う。労働者はこの貨幣で資本家から商品を買う。こうして、貨幣は資本家の手もとに還流する。

このばあい、資本家にとってG—W—Gという運動が生じ

る。資本家は、まず貨幣で労働力を買ひ(G—W)、つぎに労働者の生産した生産物を労働者に売る(W—G)。これに反して、労働者にとってW—G—Wという運動が生じる。労働者は労働力売り(W—G)、それによって得た貨幣で自分の生産した生産物の一部を買ひもどす(G—W)。労賃として支払われた貨幣の還流は必然的である。なぜなら、労働者は資本家から生活手段を買わなければならないからである。

労働者にとってのW—G—Wは、労賃の収入としての支出をあらわしている。それにたいして、資本家にとってのG—W—Gは、一見すると資本の運動をあらわしているようにみえる。しかし、このばあいの貨幣の前貸と還流は、資本の運動をあらわしているのではない。

「このG—W—Gが、労働者と資本家とのあいだにおける貨幣——資本家が労賃に支出した貨幣——の還流を表現するにすぎないばあいには、それ自体としてはなら再生産過程をあらわさず、ただ、買い手が同じ相手にたいして売り手になることをあらわすだけである。それはまた、資本としての貨幣、すなわち、G—W—G「のばあいのように」第二のGが最初のGよりも大きい貨幣額であり、したがって、Gは自己増殖する価値(資本)であるというような、資本としての貨幣をあらわすものでもない。むしろそれは、同一貨幣額(しばしばさらに少ない貨幣額)<sup>(13)</sup>がその出発点に形式的に還流することの表現でしかない」。

マルクスが、このばあいのG—W—Gが資本の再生産過程をあらわすのではなく、たんなる貨幣の形式的な還流をあらわすとのべているのは、つぎの二つの理由による。

(1) G—W—Gは、それ自体として再生産過程をあらわさず、たんに買い手が売り手になることをあらわすだけである。

(2) G—W—GのGは、G—W—Gにおける資本としてのGをあらわしているのではない。

そこで、この二つの理由について考察しよう。

(1) G—W—Gは、それ自体として再生産過程をあらわしていないとは、どういうことであろうか。これは、G—W—Gが再生産過程をあらわすばあいと比較すればよくわかる。

たとえば、資本家が労働力と生産手段を買い、それらをもってある生産物を生産したとしよう。剰余価値を考慮しないとすれば、資本家の貨幣で前貸しした価値はC+Vであり、生産物に含まれている価値もC+Vである。価値の大きさが一〇〇ポンドであれば、資本家は貨幣で一〇〇ポンドを前貸しし、いまでは一〇〇ポンドの生産物をもっている。資本家がこの生産物を売れば、資本家の手もとに貨幣が還流する。このばあいの貨幣の還流は、商品の再生産によって媒介されている（G—W…P…W—G）。つまり、貨幣がたんに形態的に商品に転化されるだけではなく、商品が現実的に生産的に消費され、貨幣で前貸しされた価値は、生産物に維持・再生産されるのである。このばあいも流通をみるかぎりではG—W—Gであるが、このG—

「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

W—Gはそのなかに商品の再生産を含んでおり、それ自体として再生産過程をあらわしているといえる。

では、なぜ資本家と労働者とのあいだの取引は、再生産過程をあらわしていないといえるのであろうか。それは、資本家と労働者とのあいだの取引で問題となるのは、たんに資本家のもっている商品と労働者のもっている商品⇄労働力との交換だけだからである。資本家は貨幣を労働者から労働力を買う。労働者はこの貨幣で資本家から商品を買う。こうして、貨幣が資本家の手もとに還流するが、もし資本家が労働者に現物で労賃を支払うとすれば、貨幣流通は生じない。このばあいG—W—Gが生じるのは、資本家が労働者に貨幣で労賃を支払うかぎりにおいてである。資本家は、自分のもっている商品で支払うかわりに貨幣で労働者に支払う。そうしたあとで、資本家は労働者に商品売り、流通から貨幣をとりもどす。このばあい資本家に貨幣が還流するのは、資本家がいざ買手としてあらわれ、つぎに売り手としてあらわれるからである。結局、資本家は労働力にたいし商品で支払ったことになり、貨幣は資本家と労働者とのあいだの取引を媒介したのち出発点に還流する。だから、このばあいのG—W—Gは商品の再生産によって媒介されていないのであり、それゆえ再生産過程をあらわしていないのである。

(2) G—W—GのGは、資本としての貨幣をあらわしていない、となぜいえるのであろうか。資本家は労働力にたいして貨

「再生産論」における貨幣の前貨と還流について

幣で支払い、その貨幣をあとから労働者に商品売ることによってとりもどすが、このことによって資本家はもうけるわけではない。これは、事実上資本家が労働力にたいし商品で代価を支払ったことと同じである。資本家が富裕になるのは、労賃として支払ったものよりも多くの労働を生産過程において取得することによってのみである。たんなる貨幣の形式的な還流は、価値増殖過程とは無関係であり、資本としてのGをあらわしていない。

資本家と労働者とのあいだの取引は、まず資本家が自分の商品の指図証で支払い、つぎに労働者が指図証と引き換えに商品を受け取った、と考えることもできる。<sup>(14)</sup>

以上のように、社会的再生産を媒介するG—W—Gは再生産過程をあらわさず、資本としての貨幣の運動をあらわしていないのである。

マルクスは、資本家と労働者とのあいだの貨幣流通と同じことが、不変資本の交換についてもいえるとのべている。

「たとえば、不変資本の交換においても同じである。機械製造業者が、製鉄業者から鉄を買って、彼に機械を売る。このばあいには貨幣は還流する。貨幣は鉄の購買手段として支出された。つぎにそれは、製鉄業者にとって機械の購買手段として役立つ。そして機械製造業者の手もとに還流する。機械製造業者は、支出した貨幣のかわりに鉄を入手し、入手した貨幣のかわりに機械を与えた。同一貨幣額がここではその二倍の価値を流

通させた」<sup>(15)</sup>。

このばあい、実際に交換されたものは、機械製造業者の機械と製鉄業者の鉄である。機械と鉄が現物で交換されたとすれば、貨幣流通は生じなかったであろう。しかし、機械と鉄との交換が貨幣によって媒介されなければならないかぎりで、機械製造業者は機械のほかに手もとにもっている貨幣で鉄を買わねばならなかった。機械製造業者が鉄にたいし貨幣を支払わねばならないのは、鉄にたいし機械で直接に代価を支払わないからである。すなわち、機械製造業者は製鉄業者にたいし買い手として相対するが、売り手としては相対しなかったからである。つぎに、機械製造業者が製鉄業者に機械を売れば、機械製造業者は鉄にたいし機械で支払をすませたことになり、製鉄業者は機械製造業者に貨幣を返さなければならぬ。なぜなら、製鉄業者は鉄にたいし貨幣と商品で二重に支払をうけることはできないからである。こうして、機械製造業者の手もとに貨幣が還流する。

このばあいの貨幣は、機械と鉄との交換を媒介しているだけであり、流通手段としてのみ機能している。機械製造業者と製鉄業者の結果からみれば、相互に買い手および売り手として二重に相対している。だが、この交換が貨幣によって媒介されなければならないかぎりでは、機械製造業者はまず買い手としてあらわれ、つぎに売り手としてあらわれた。製鉄業者のばあいは、この逆である。貨幣の還流は、商品によって支払がすまされることを条件としている。

「だからここでは、貨幣の還流は、ただ、商品と引き換えに貨幣を支出し流通に投じた人が、べつの商品を通流に投げ入れその販売を通じて貨幣を流通から取りもどすということ<sup>(16)</sup>を、あ  
らわしているにすぎない」。

機械と鉄との交換は不変資本の交換であり、資本家にとって  
は資本の流通をあらわしている。しかし資本の流通を媒介する  
貨幣の前貸と還流は、それ自身が資本の再生産過程をあらわし  
ているのではなく、たんなる貨幣の形式的な還流をあらわして  
いるにすぎない。機械製造業者は機械と鉄との交換の媒介のた  
めのみ貨幣を前貸したのであり、この貨幣は交換を媒介し  
たのち出発点に還流する。このばあい、貨幣は流通手段として  
のみ機能するのであって、資本として運動するのではない。

以上のように社会的再生産を媒介する貨幣の前貸と還流は、  
資本としての貨幣の前貸と還流をあらわすのではなく、たんに  
流通手段としての貨幣の形式的な還流をあらわすのである。

(9) 本稿ではマルクスによるケネーの『経済表』の把握だけが問題  
とされる。

Theorien über den Mehrwert (Vierter Band des „Kapitals“)  
Marx-Engels Werke Band 26, I, s. 282-319. (邦訳『剰余価値学  
説史』I、大月書店『マルクス・エンゲルス全集』第二六巻)以  
下引用にさして『剰余価値学説史』は「Th.」と略記し、原書ページ  
を示す。

(10) 社会的再生産を媒介する貨幣の前貸と還流を利潤を生みだす貨  
「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

幣の還流と誤って解釈した例としてデステュット・ド・トランがあ  
げられる。マルクスはケネーの『経済表』を考察する前にトランの  
見解を批判している (Th. I, s. 249-252)。トランの見解を考察し  
たことが、G—W—Gの内容をただしく規定する一つのきっかけと  
なったとおもわれる。トランは、貨幣の還流を利潤の発生の一つの  
原因と考えたのであるが、マルクスによるトラン批判の結論は、つ  
ぎのとおりである。

「この貨幣還流は、資本家たちが賃銀と賃料とを商品で支払うの  
ではなく、最初に貨幣で支払うのだということ、すなわち、この貨  
幣をもって彼らの商品が買われるのであり、したがって、彼らはこ  
の回り道を経て商品で支払ったのだということ、以外にはなにも意  
味しない」(Ibid. s. 249)。

(11) Ibid. s. 308

(12) マルクスは、「貨幣の形式的な還流」について資本家と労働者  
とのあいだの取引を考察する前に、借地農業者と地主とのあいだの  
取引の考察のさいにふれている。

「これに反し、前述のような地主から借地農業者への貨幣の還流  
においては、なら再生産過程は生じない。それはちょうど、借地  
農業者が地主に一〇億の生産物にたいする預り証または引換券を与  
えたやうなものである」(Ibid. s. 287)。

(14) 「G—W—Gは、それが資本家の手もとへの貨幣の形式的な還  
流をあらわすかぎりでは、ただ、貨幣で振り出された彼の指図証  
が彼自身の商品において実現されたことをあらわすだけである」  
(Ibid. s. 299)。

(15) Ibid. s. 299-300

(16) Ibid. s. 300 買い手が売り手になることで生じるこうした貨幣の還流は、社会的再生産を媒介する貨幣流通においてだけではなく、単純な貨幣流通においても起こりうる。ここでは、流通手段としての貨幣は  $W \rightarrow G \rightarrow W$  の媒介として示される。だが、そのばあいでも商品所有者がまず買い手としてあらわれねばならないかぎりで、流通形態  $G \rightarrow W \rightarrow G$  が生じる。これは、 $W \rightarrow G \rightarrow W$  とは逆の形態だといえ、内容からみれば流通手段としての貨幣をあらわしている。〔『経済学批判』第二章、「二、流通手段 b 貨幣の流通」参照〕。

## 二

マルクスは S と F とのあいだの貨幣流通について立ち入って考察し、貨幣の持ち手交換が生じるばあいと貨幣の還流が生じるばあいのそれぞれの条件を明らかにしている。そして、そのさいの貨幣の役割と流通手段の前貸の規定について説明している。

第一のばあい。S は F から一〇億の生活手段と一〇億の原料を買い、F は S から一〇億の製造品を買う。S は F よりも一〇億の商品を多く買うのだから、F にたいし差額一〇億を貨幣で支払わなければならない。ケネーの『経済表』によれば、S は P から一〇億の貨幣を受け取るようになっていいる。

このばあいの取引は、つぎようになる。

まず S が P から受け取った一〇億の貨幣で F から生活手段を買う。F はこの貨幣で S から製造品を買う。さらに、S はこの

貨幣で F から原料を買う。こうして、S から出発した貨幣は S に還流せず、F の手もとに保持される。

S の流通に投入した貨幣が S に還流しないのは、S が F にたいし一〇億の貨幣差額をもっているからである。S は余分に買う一〇億の商品にたいし、一〇億の貨幣を支払わなければならない。このばあい一〇億の貨幣は、持ち手を交換する。

第二のばあい。S は P から受け取る一〇億の貨幣のほかに自分で一〇億の貨幣をもっている。S は二〇億の貨幣で一度に F から生活手段と原料を買う。F は一〇億の貨幣で S から製造品を買う。こうして、一〇億の貨幣が F から S に帰ってくる。S の流通に投入した二〇億の貨幣のうち、一〇億が S に還流し、一〇億が F の手もとに保持される。

S は F にたいし一〇億の貨幣差額をもっており、そのかぎりで一〇億の貨幣は持ち手を交換する。

ところが、S は F にたいする一〇億の貨幣差額のほかに一〇億の貨幣を前貸している。S は F に二〇億の貨幣と一〇億の商品を渡しているが、F から二〇億の商品しか受け取らない。それゆえ、F は S に一〇億の貨幣を返さなければならない。

「なぜなら S は、一〇億分の商品のほかに、一〇億分の貨幣を、この流通過程に先立って存在していた彼自身の財源のうちから、流通に投じたのだからである。彼はそれを流通のために投下したのであって、それゆえ、それが彼の手もとに還流するのである」<sup>(17)</sup>。

SとFは、現実には一〇億の商品プラス一〇億の貨幣と二〇億の商品を交換している。Sがそのほかに一〇億の貨幣を自分の財源から前貸しするとすれば、その貨幣はSの手に還流する。

第三のばあい。SとFが相互に二〇億の商品を交換するばあいに、Sがさき取引を始めるるとすれば、Sは二〇億の貨幣でFから二〇億の商品を買う。つぎに、Fがこの貨幣でSから二〇億の商品を買う。SとFは、相互に二〇億の商品を交換し、Sの前貸しした二〇億の貨幣はSの手に還流する。

このばあいSとFは、相互に買い手および売り手として二重に向いあっており、商品を現物で交換したとすれば、貨幣の前貸しが必要ではない。しかし、Sが相互に交換される商品額のほかに貨幣を流通に前貸しすれば、その貨幣は商品交換を媒介したのちSの手に還流する。このばあい、貨幣はただ流通手段としてのみ機能するのであり、Sが流通のために自分の資本で貨幣の流通空費をまかなったのである。

「このばあいには貨幣は、それを流通のために前貸して自分の資本で流通費をまかなった者の手もとに帰ってくる」<sup>(18)</sup>。

貨幣の還流は、交換される価値額のほかに流通のために貨幣を前貸した者に向って生じる。そのさい貨幣は流通手段としてのみ機能する。

「これらすべてのばあいに、貨幣は、それをいわば流通に前貸した人の手もとに還流する。貨幣は、銀行券と同じように、流通のなかでその用務を果たし、その支出者の手もとに帰

「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

ってくる。このばあいには貨幣はただ流通手段となるにすぎない。最終の資本家たちが互いに支払いあうのであり、こうして貨幣はその支出者の手もとに帰ってくるのである」<sup>(19)</sup>。

SとFは相互に生産要素を交換しており、そのかぎりでの交換は資本の流通をあらわしている。Sは生産要素の買入れに二〇億の貨幣を前貸しし、その面からみれば、これはSにとって資本の前貸である。しかし、この貨幣は交換される商品額のほかに流通に前貸しされ、商品交換を媒介したのち出発点に還流する。したがって、この貨幣は資本として運動しているのではなく、流通手段としてのみ機能しているのである。このような交換される商品額のほかに流通のために前貸しされる貨幣の前貸が、流通手段の前貸と規定される<sup>(20)</sup>。流通手段の前貸とは、べつのいい方をすれば、流通のための貨幣を自分の資本で負担することでもある。

(17) Th. I, s. 310

(18) Ibid. s. 315

(19) Ibid. s. 318

(20) SとFが一〇億づつ貨幣を前貸しすれば、つぎのようになる。

「両者が流通手段を等分に前貸しするとすれば、両者のそれぞれの手もとに、各人がまえもって流通に投入したものが帰ってくる」

(Ibid. s. 315)。

流通手段の前貸について注意すべきことは、たんに流通に貨幣を投入することは流通手段の前貸ではない、ということである。Fは

## 「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

二九〇

Sの前貸した二〇億の貨幣をSから商品を買うときに流通に投入するが、これは流通のための流通手段の前貸ではない。

## 第二節 『資本論』第二部第三篇における貨幣の還流法則

本節では、一において第二部第三篇における貨幣の還流法則の内容を考察し、「余論 ケネーによる経済表」で明らかにされた貨幣の形式的な還流および流通手段の前貸との関連を説明する。二では、社会的再生産に独自の流通手段の前貸と區別される資本の前貸とはなにかを考察する。それを明らかにするために、個別資本の循環・回転における貨幣資本の役割と社会的総資本の再生産における貨幣資本の役割との関連を明確にする必要がある。最後に、個別資本にとっての貨幣資本は、社会的再生産の立場からみれば、すべて流通手段となるという見解を検討する。

『資本論』では、つぎの表式にもとづいて年間社会的生産物の転換が考察されている。

- I 4000C + 1000V + 1000m = 6000 生産手段
- II 2000C + 500V + 500m = 3000 消費手段
- Ic および II (V + m) は部門内で相互に交換され、I (V + m) 対 IIc は部門間で相互に交換される。かくして、両部門の不変資本が補填され、資本家および労働者の個人的消費がまか

なわれる。しかし、年間生産物の転換は貨幣流通による媒介によつてのみ行なわれるのであり、したがって、年間生産物の転換が貨幣流通によつてどのように媒介されるかが考察されなければならない。ここでは、I 1000HとII 1000Cとの転換を例として考察しよう。マルクスは、この二〇〇〇の商品の流通のために資本家Iと資本家IIとがそれぞれ五〇〇の貨幣を前貸すると想定している。そのばあい商品Iと商品IIとが交換されるだけではなく、つぎのようになる。

「それだけではなく、IIには五〇〇ポンドの貨幣資本が帰ってくるが、この五〇〇ポンドは、IIが、不変資本のうちこの額に相当しこれを補償する価値部分——それは消費手段の形態で存在する——を売る前に、生産手段の買い入れに前貸したものである。また、さらにIには、Iが消費手段の買い入れにもつて支出した五〇〇ポンドが帰ってくる。IIには自分の商品生産物の不変部分をあてにして前貸した貨幣が還流し、またIには自分の商品生産物の剰余価値部分をあてにして前貸した貨幣が還流するとすれば、それは、ただ、一方の資本家は商品形態IIで存在する不変資本のほかに、他方の資本家は商品形態Iで存在する剰余価値のほかに、なおそれぞれ五〇〇ポンドの貨幣を流通に投じたからではない。彼らは、結局、それぞれの商品等価の交換によつて、互いに完全に支払をすませたのである。彼らが彼らの商品の価値額のほかにこの商品転換の手段として流通に投じた貨幣は、彼らのそれぞれが流通に投じた

割合に応じて、流通から彼らのそれぞれに帰ってくる」。

まず、資本金Ⅱが生産手段の買い入れに五〇〇の貨幣を前貸しする。資本金Ⅰはこの貨幣で部門Ⅱから消費手段を買う。こうして、不変資本価値をあらわす消費手段が実現されることによって、資本金Ⅱに貨幣が還流する。

つぎに、資本金Ⅰは剰余価値部分をあらわす生産手段をあてにして、消費手段の買い入れに五〇〇の貨幣を前貸しする。資本金Ⅱはこの貨幣で部門Ⅰから生産手段を買う。こうして、資本金Ⅰに貨幣が還流する。

以上で説明された年間商品生産物の相互的転換のさいの貨幣の前貸と還流は、どのような内容・規定をもつと考えるべきであらうか。

このばあいの貨幣の前貸は、商品転換の媒介のための流通手段の前貸である、と考えることができる。資本金Ⅰと資本金Ⅱとは商品等価を交換しており、商品等価の交換の媒介のために貨幣を前貸したのである。すなわち、彼らは「彼らの商品の価値額のほかにこの商品転換の手段として」貨幣を流通に投じたのである。商品転換の媒介のために流通に投じられた貨幣は、流通手段としての機能し、商品転換を媒介したのち出発点に還流する。流通手段としての貨幣の還流は、商品等価の交換によって相互に支払いが完全にすまされることを条件としている。

資本金Ⅱは、この商品転換によって商品資本を生産資本に転

「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

換している。その面からみれば、この商品転換は資本の流通を意味している。しかし、資本金Ⅱは商品資本の生産資本への転換のために不変資本価値をあらわす商品資本のほかに貨幣を前貸しなければならなかった。この貨幣は、生産手段の買い入れに前貸しされるかぎり、資本金Ⅱにとって貨幣資本をあらわしている。だが、この貨幣は生産資本に転換されたあとで、商品資本が実現されることによって資本金Ⅱの手もとに帰ってくる。このばあい貨幣は、たんに買い手が売り手になることで還流したのであり、資本として運動したのではない。貨幣資本は商品資本の生産資本への転換の媒介のために前貸しされるばあいには、流通手段としてのみ機能する。

「貨幣資本の機能は、それがただ流通手段として役立つのであろうと支払手段として役立つのであろうと、ただWをAとPmに取り替えることを、すなわち生産資本の結果である商品生産物としての糸をその生産要素に取り替えることを、つまり資本価値が商品としての形態からこの商品の形成要素に再転換することを媒介するだけである。要するに、それはただ商品資本が生産資本に再転換することを媒介するだけである」。

資本金Ⅱは不変資本価値をあらわす商品資本のほかに貨幣資本を前貸しするが、この貨幣資本は商品資本の生産資本への転換を媒介するだけである。このような商品資本のほかに商品転換の媒介として流通に投じられる貨幣の前貸は、社会的再生産の立場からみて、流通手段の前貸と規定される。

また、資本家Ⅰはこの商品転換によって剰余価値をあらわす生産手段を消費手段に転換している。その面からみれば、この商品転換は収入の流通を意味している。しかし、資本家Ⅰもこの商品転換のために貨幣を前貸ししなければならなかった。収入の支出のために流通に投じられた貨幣は、あとから生産手段が実現されることによって資本家Ⅰに帰ってくる。このばあい

貨幣は、商品Ⅰと商品Ⅱとの交換の媒介として機能しているにすぎない。なぜなら、剰余価値をあらわす生産手段が消費手段に転換されているが、この転換のために前貸しされた貨幣は、この転換のあとでも資本家Ⅰの手もとに存在しており、それ自体が収入として支出され消費されているわけではないからである。資本家Ⅰによる収入の支出のための貨幣の前貸も流通手段の前貸と規定される。

ここでつぎの点に注意すべきである。

資本家Ⅰが収入の支出のために前貸した貨幣を、資本家Ⅱは生産手段の買入れのさいに貨幣資本として前貸しする。しかし、このばあいの資本家Ⅱによる貨幣資本の前貸は、流通手段の前貸ではない。資本家Ⅱが商品Ⅱを実現し、不変資本価値をあらわす貨幣を流通に投じることでは、それはたんなる貨幣資本の前貸にすぎない。<sup>(23)</sup> それにたいして、資本家Ⅱが不変資本価値をあらわす商品資本のほかに商品転換の手段として貨幣資本を前貸しするとすれば、それは社会的再生産の立場からみて、流通手段の前貸の規定をもつ。流通手段の前貸とは、たんに

に貨幣資本または収入として貨幣を流通に投じることではなく、商品資本のほかに商品転換の媒介として追加的に貨幣を流通に前貸しすることをあらわすのである。

マルクスは、商品交換の媒介のための貨幣の前貸とその還流を、貨幣の一般的還流法則と規定している。

「——一般的にいえばつぎのようになる。産業資本家が彼ら自身の商品流通の媒介のために流通に投ずる貨幣は、商品の不変資本価値部分をあてにして投ずるのである」と、収入として支出されるかぎりでの、商品に含まれている剰余価値をあてにして投ずるのであると、彼らが貨幣流通のために前貸ししただけの額がそれぞれの資本家の手に帰ってくるのである。<sup>(24)</sup>

貨幣の還流法則は、商品交換の媒介のための流通手段の前貸と還流をあらわしており、それ自体が資本の再生産過程をあらわしているのではない。個別資本家は資本の前貸または収入の支出にさいして貨幣を流通に前貸しする。しかし、この貨幣の前貸が流通手段の前貸と規定されるのは、貨幣が商品資本のほかに追加的に前貸しされるかぎりにおいてである。年間生産物の相互的転換が前提されれば、貨幣の還流法則は一般的に妥当する。

ところで、前節では「余論 ケネーによる経済表」を考察し、そこでの貨幣の形式的な還流および流通手段の前貸の規定について明らかにしたが、これらの問題が、『資本論』第二部第三篇では社会的再生産を媒介する貨幣の還流法則としてより

明確にかつ一般的に解明されているといえよう。「余論」においては、貨幣の形式的な還流がいかん資本の前貸と還流とちがっているか、さまざまな角度から論じられていたが、第二部第三篇ではこのような付論はみあたらない。しかし、貨幣の還流法則の説明は、「余論」で明らかにされた論点を土台にしていることは疑いない。貨幣の還流法則にかんして重要なことは、貨幣は商品転換の手段として商品資本の実現をあてにして前貸しされ、買手が売り手になれば出発点に還流すること、である。かかる貨幣の還流法則の内容を考えるならば、すでに「余論」において、社会的再生産を媒介する貨幣の還流運動にかんする基本問題が解明されていたといえよう。ただ、「余論」ではケネーの『経済表』の批判的理解が主要問題であるため、貨幣の形式的な還流および流通手段の前貸の問題は、付論としてあつかわれている。これに反して、第二部第三篇では、貨幣の還流法則は社会的再生産を媒介する貨幣流通における重要な法則として不可欠の位置をしめている。

「余論」と第二部第三篇とにおける貨幣の還流の説明で、重要な相違とみられるのはつぎの点である。

マルクスは、「余論」では、産業資本家が自分の収入(剰余価値)を消費するさいに自分で貨幣を前貸ししなければならない点を、まだ明確にしていけないようにおもわれる。

「たとえば、資本家自身も年々一定量のを消費する。彼はすでに自分の商品を貨幣に転化させていて、この貨幣を自分

「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

が最終的に消費しようとする商品にたいして支出する。このばあいには  $W \rightarrow G \rightarrow W$  であって、彼への還流は起こらず、売り手(たとえば小売商人)への還流が起り、収入の支出が、この売り手の資本を補填するのである」<sup>(25)</sup>。

ここでは、小売商人が資本家の収入をあらわす商品を貨幣化すると想定されており、資本家自身が剰余価値を流通させるための貨幣を前貸ししなければならない、という論点はでない。このことは、マルクスのつぎの問題提起とも関連している。

「ところで、資本家全体つまり産業資本家階級が、彼らの投入するよりも多くの貨幣をたえず流通から引きだすということは、どうして可能なのか?」<sup>(26)</sup>。

この問題は、「余論」では提起されただけである。つまり、「余論」では剰余価値の流通の問題は解決されていないのである。産業資本家が不変資本、可変資本だけではなく、剰余価値の流通のためにも貨幣を前貸しすることが明らかにされはじめ、社会的再生産を媒介する貨幣流通は全面的に説明されるのである。

(21) K. II, s. 400

(22) Ibid. s. 77

(23) このばあい、資本家Ⅱの前貸しする貨幣資本は、 $W \rightarrow G \rightarrow P_m$  の媒介の形態であり、たんに流通手段として機能する。

「流通  $W \rightarrow G \rightarrow W \rightarrow P_m$  では、同じ貨幣が二度位置を取り替える。

資本家はまず売り手としてそれを受け取り、それから買い手としてそれを手放す。商品の貨幣形態への転化は、ただ商品を貨幣形態から商品形態に転化させるのに役立つだけである。だから、資本の貨幣形態、貨幣資本としての資本の存在は、この運動ではただ一時的な契機でしかない。すなわち、貨幣資本は、運動がよどみなく行なわれるかぎり、それが購買手段として役立つばあいにはただ流通手段としてあらわれるだけである」(Ibid.)

(24) Ibid. s. 400

(25) Th. I, s. 302

(26) Ibid. s. 303

二

これまでの考察によって流通手段の前貸とはなにか明らかにされたが、つぎの問題になるのは、これと区別されるころの資本の前貸とはなにかである。この問題を考えるためには第三章第三三章の一節の解釈に立ち帰るとともに、個別資本の循環・回転における貨幣資本の役割と社会的総資本の再生産における貨幣資本の役割との関連が明らかにされなければならない。はじめに、第三部第三三章の一節を引用しよう。

「流通手段の支出と資本の貸出との区別は、現実の再生産過程ではもっともよくあらわれている。われわれは前に(第二部第三篇で)、生産のいろいろな成分がどのように交換されるかを見た。たとえば、可変資本は物的には労働者の生活手段であり、彼ら自身の生産物の一部分である。しかし、それは彼らに

は少しづつ貨幣で支払われてきたものである。この貨幣を資本家は前貸ししなければならない。……一つの社会的総資本のいろいろな成分のあいだの交換行為、たとえば消費手段と消費手段の生産手段とのあいだの交換行為のばあいも同じである。これらのものの流通のための貨幣は、すでに見たように、交換者の一方または双方によって前貸しされなければならない。そこでこの貨幣は流通のなかに留まるのであるが、交換が終われば必ずまたそれを前貸した人の手に帰ってくる。なぜならば、その貨幣は彼によって自分の現実に就業する産業資本以上に前貸されたのだからである(第二部第二〇章を見よ)。信用制度が発達していて貨幣が銀行の手に集中されているばあいには、銀行は、少なくとも名目的には、貨幣を前貸しする者である。この前貸は、ただ流通中の貨幣に関係があるだけである。それは通貨の前貸であって、それによって流通させられる資本の前貸ではないのである」(27)

もし産業資本家が現実に生産資本として充用する資本のほかにもっともに貨幣をもっていなければ、商品の販売に先立って購買を行なうためには、銀行から貨幣を借りなければならない。産業資本家は借り入れた貨幣を持続させるために生産要素の買入れに前貸しする。この貨幣は商品の販売に先立って購買に前貸しされ、商品の貨幣形態の先取りをあらわしている。この貨幣は、あとから商品資本が表現されて産業資本家の手もとに還流するが、貨幣の前貸によってすでに商品資本は生

産資本に転化されている。したがって、このばあい貨幣は、商品資本の実現に先立って商品資本の生産資本への転換を媒介しており、それ自体は流通手段として機能している。貨幣は買い手が売り手になることで産業資本家の手もとに形式的に還流するのであり、現実には流通手段として運動したのではない。銀行による流通手段の前貸とは、「現実には就業する産業資本」のほかに商品資本の流通の媒介に必要な貨幣を前貸しすることを、あらわしている。

右のような流通手段の前貸にたいして、資本の前貸はどのようにに区別されているであろうか。

さきの引用において、流通手段としての貨幣は「現実には就業する産業資本以上に前貸しされた」貨幣として、「現実には就業する産業資本」と区別されている。また、銀行による通貨の前貸は、「ただ流通中の貨幣に関係があるだけである」とされ、「それによって流通させられる資本の前貸」と区別されている。したがって、この文章では、商品資本の流通にのみ必要な流通手段の前貸と、「現実には就業する産業資本」の前貸とが区別されているといえる。しかし、銀行による「現実には就業する産業資本」の前貸とはどのようなばあいであろうか。

この問題を考えるためには、個別資本の循環・回転における貨幣資本と社会的総資本の再生産における貨幣資本との関連が明らかにされていなければならない。

個別資本の循環において貨幣資本は、つぎのように区別され

「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

る。

「 $G \dots G'$ ではGは資本価値の最初の形態であって、それが捨てられるのは、再びとられるためである。 $P \dots W' \dots G' \dots W \dots P$ では、Gはただ過程のなかでとられる形態であって、すでに過程のなかで再び捨てられる形態である。貨幣形態は、ここではただ資本の一次的な独立な価値形態としてあらわれるだけである。……Gは、ここでは流通手段として働くのであるが、しかし資本の流通手段としてである」<sup>(28)</sup>。

また、個別資本の回転において貨幣資本は、つぎのように区別される。

「個別資本の回転を考察したときには、貨幣資本は二つの側面から明らかにされた。

第一に、貨幣資本は、どの個別資本が舞台にあらわれて資本としてその過程を開始するときにもその形態をなしている。それだから、貨幣資本は、全過程に衝撃を加える起動力としてあらわれるのである。

第二に、回転期間の長さが違えば、またその二つの構成部分——労働期間と流通期間と——の割合が違えば、前貸資本価値のうちのためず貨幣形態で前貸しされ更新されなければならない構成部分と、それによって動かされる生産資本すなわち連続的な生産規模との割合も違ってくる。しかし、この割合がどうであろうと、どんな事情のもとでも、過程進行中の資本価値のうちたえず生産資本として機能することのできる部分は、前貸

資本価値のうちたえず生産資本と並んで貨幣形態で存在しなければならぬ部分によって、制限されている<sup>29)</sup>。

以上の引用が示すように、個別資本の循環および回転において貨幣資本の役割には区別がある。

一、貨幣資本は、資本価値の最初の形態であり、資本としての運動を開始するときの形態である。貨幣資本は資本の再生産過程の起動力としてあらわれ、生産資本に転化される。

二、貨幣資本は、W—G—Wの媒介の形態であり、流通手段として機能する。前貸資本価値の一部は、生産資本の連続性を維持するためにたえず貨幣形態に投下されていなければならない。したがって、この貨幣資本は前貸資本の一部が生産過程に投下されずに、流通のために投下されていることをあらわす。

第一の貨幣資本が、現実には価値増殖の機能を行なう生産資本に転化される資本価値をあらわすとすれば、第二の貨幣資本は、生産資本を機能させるために流通に投下される資本価値をあらわす。第二の貨幣資本も生産要素の購買に投下され、その面からみれば資本として機能する。しかし、一方で貨幣資本が生産資本に転化されるとすれば、他方で商品資本が貨幣資本に再転化されており、前貸資本価値の一部はたえず貨幣資本の形態になければならない。このような貨幣資本は、W—G—Wの媒介としてのみ役立つ。

さて、この個別資本の循環・回転においてあらわれる貨幣資本の役割の区別は、社会的再生産における流通手段の前貸と資

本の前貸との区別と、どんな関係にあるであろうか。

社会的再生産における流通手段の前貸とは、商品資本の流通のために追加的に貨幣を前貸しすることである。これは、明らかに第二の貨幣資本と関連している。個別資本は、生産資本の連続性を維持するために、たえず貨幣資本を準備していなければならない。この貨幣資本は、社会的総資本の再生産において商品資本を流通させるために必要な追加貨幣としてあらわれる。銀行が第二の貨幣資本を産業資本家に前貸しするかぎり、流通手段を前貸しすることになる。

第一の貨幣資本は、資本が運動を開始するさいの形態であり、生産資本に転化される資本価値をあらわしている。それゆえ、第一の貨幣資本は、「現実には就業する産業資本」に転化されることができる。第二の貨幣資本の銀行による前貸が、社会的再生産の立場からみて、流通手段の前貸と規定されるとすれば、第一の貨幣資本の銀行による前貸は、「現実には就業する産業資本」へ転化される貨幣資本の前貸であり、社会的再生産の立場からみて、資本の前貸と規定される<sup>30)</sup>。

以上で、個別資本による貨幣資本の前貸の二つの契機と、社会的再生産の立場からみた、流通手段の前貸と資本の前貸との区別の関連が明らかになったとおもわれる。しかし、個別資本にとっての貨幣資本は、社会的再生産の立場からすれば、すべて流通手段であるという見解があるので、ここでその見解を検討しておくことにしよう。

木村二郎氏は、論文「貨幣資本の役割」と再生産表式<sup>(31)</sup>において、「個別資本の循環・回転における貨幣資本と再生産表式分析における流通手段たる貨幣との基本的関連を」明確にしようとした。

氏の見解をよく示す文章を引用しよう。

「貨幣資本の第一側面とは、『全過程に衝撃を加える起動力』としての貨幣資本であった。これは、個別資本の循環の『出発点』あるいは『連続的動力』をなすものであった。この起動力として貨幣資本は、個別資本あるいは社会的資本の循環・回転という言葉は縦の糸からの規定をなす。資本が生産手段なり労働力なりを購入する場合には貨幣を流通に投入するが、この貨幣は、社会的総資本の流通の観点からみれば商品資本の交換を媒介する流通手段そのものである。だから、『起動力』としての貨幣資本と流通手段とは、同じものを別の角度から見たものである。つまり、資本循環・回転の縦糸の観点からみれば『起動力』としての貨幣資本であるものが、社会的総資本の流通という横糸の観点からみれば流通手段であることになるのである<sup>(32)</sup>。また、つぎのようにのべられている。

「個別資本が起動力として流通に投下する貨幣資本は、社会的流通を媒介する貨幣（流通手段）を成す。従って、追加貨幣のみならず前貸総資本が流通手段になりうるのであって、久留間氏のように流通手段を追加資本部分だけに限定する理由はない<sup>(33)</sup>」。

「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

みられるように、氏は、個別資本の投下する貨幣資本は、第一の貨幣資本も第二の貨幣資本も社会的再生産においてすべて流通手段となり、貨幣資本と流通手段との区別は、縦糸の観点と横糸の観点との相違<sup>(34)</sup>だ、と考えておられるのである。

しかし、さきに個別資本の循環・回転における貨幣資本の役割の区別を考察したさいに明らかにしたように、個別資本による貨幣資本の前貸が、社会的再生産の立場からみて、流通手段の前貸と規定されるのは、第二の貨幣資本にかんしてのみである。第二の貨幣資本は、生産資本を機能させるためにたえず貨幣形態をとらねばならない前貸資本価値の一部であり、社会的再生産の考察において、商品資本の流通の媒介のための流通手段としてあらわれる。第二の貨幣資本が、社会的再生産において流通手段となるのは、すでに資本の循環・回転においてW—G—Wの媒介の形態にあり、再生産過程の媒介としてのみ機能しているからである。貨幣資本の第二側面は、生産資本循環の視角からの貨幣資本の規定であり、この規定は、商品資本循環が前提されるかぎりでの社会的再生産における貨幣資本にも妥当する。

ところが、氏は起動力としての貨幣資本も生産要素の購買に前貸しされ、社会的再生産の立場からみれば流通手段となる、といわれる。だが、貨幣資本をたんに購買のために前貸しすることは、それだけでは社会的再生産の立場からみて、流通手段を前貸ししたことにはならない。個別資本の投下する貨幣資本

### 「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

が、社会的再生産の立場からみて、流通手段となるといえるのは、貨幣資本が生産過程に投下される資本価値のほかに前貸しされるばあいだけである。

商品資本の流通の媒介のためには、個別資本家が生産資本のほかにもっている貨幣資本が前貸されるのであって、第一側面の貨幣資本が前貸されるのではない。なぜなら、第一側面の貨幣資本は再生産過程の起動力となるのであり、再生産過程の媒介のために投下されるわけではないからである。

貨幣資本の第一側面は、貨幣資本循環の視角からの規定であり、この規定は、商品資本循環における貨幣資本には妥当しない。貨幣資本が、社会的再生産において流通手段となるのは、W—G—Wの媒介としてあらわれかざるぎりにおいてである。

(27) K. III, s. 546-547

(28) K. II, s. 78「原稿ではここにマルクスの筆蹟で『トックにたいて』と記入してある」(Ibid. 編集者注)。これを見ると、マルクスはこの文章で、「資本の流通手段」を資本と解したトックにたいする批判を意図しているのである。

(29) Ibid. s. 354

(30) この理解は、久留間氏の見解に多くを負っている。久留間、前掲論文。

(31) 木村二郎「貨幣資本の役割」と再生産表式」(『橋論叢』第八〇巻、第四号、一九七八年一〇月、所載)。

(32) 木村、前掲論文、九九—一〇〇ページ。

(33) 木村、前掲論文、一〇八ページ。

(34) 木村氏は、資本循環・回転の視角を縦系的観点、社会的再生産の視角を横系的観点といわれるが、社会的再生産は商品資本循環の視角から考察されており、このような縦系的、横系的という区別は、理論的な意味がはっきりしない。

### 第三節 社会的再生産における独自の貨幣資本の前貸

年間商品生産物の相互的転換が前提されるかぎりでは、貨幣は流通手段としてのみ機能し、商品転換の媒介のための貨幣の前貸は流通手段の前貸と規定された。しかし、年間生産物の転換には相互的転換に分解できない契機が存在している。固定資本の補填および資本蓄積のばあいである。そのばあい、貨幣がどんな役割を演じるのか、問題となる。この問題の考察は、社会的再生産における固定資本の補填および資本蓄積のさいの貨幣前貸は「資本の前貸」であろうが、社会的生産物の流通に必要な流通手段を供給しており、社会的再生産の立場からすれば、やはり流通手段の前貸にすぎない、という見解を検討するための前提となる。

一 固定資本の補填にかんして、マルクスはつぎのようにのべている。

「単純な商品流通がたんなる生産物交換と同じではないように、年間商品生産物の転換も、そのさまざまな成分のたんなる

直接的な相互的交換に分解することはできない。ここでは貨幣が一つの独自の役割を演じており、この役割はことにまた固定資本価値の再生産の様式にもあらわれている<sup>(35)</sup>。

ここでは、固定資本の補填のさいに年間商品生産物の相互的交換が行なわれず、そのさい貨幣が一つの独自の役割を演じることが指摘されている。そこで、社会的再生産における固定資本の補填のさいの貨幣の独自の役割とはなにかについて考察しよう。

固定資本は何年ものあいだ生産過程で機能しうるのであって、固定資本の損耗価値部分だけが、固定資本の現物での補填が必要になるときまで、貨幣形態で積み立てられる。固定資本の寿命が尽きたときに、固定資本価値はすべて貨幣形態に転化されており、この貨幣によって固定資本は現物補填される。したがって、固定資本価値は、流動資本価値のように毎年W—G—Wという流通を行なうのではなく、固定資本が機能しているあいだは損耗分だけがW—Gを行ない、固定資本の現物補填が必要になったときに一括してG—Wを行なうのである。つまり、固定資本価値は年間再生産においてW—GまたはG—Wを行なうのであり、社会的再生産における契機として固定資本の補填を考慮すれば、年間商品生産物の一方的転換が生じるのである。

年間生産物の転換において固定資本の補填は、つぎのようにあらわれる。

#### 「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

I (1000V + 1000m) と II 2000C との転換を例とすれば、II 2000C にだけ固定資本の損耗価値部分が含まれている。I (V + m) は全部が消費手段の現物形態である IIc に転換されなければならないが、IIc のほうは全部が I (V + m) に転換されることはできない。というのは、II 2000C (D) を固定資本の損耗分とすれば、この部分は一方的に販売されて貨幣形態で沈澱しなければならぬからである。それゆえ、I 2000m と II 2000C (D) とが転換できずに残ることになる。

だが、これまでは固定資本の損耗分の貨幣形態での積み立てが考慮されただけであって、固定資本の現物補填については考慮されなかった。一方の資本家部類が固定資本の損耗分を貨幣で積み立てているとすれば、他方の資本家部類はすでに貨幣蓄蔵を終わっており、固定資本の現物補填の時期に達しているのである。前者を部分2、後者を部分1としよう。部分1は、積み立ての終わった貨幣で部門Iから固定資本の現物要素である I 2000m を買う。資本家Iはこの貨幣で部分2から固定資本の損耗価値をあらわす消費手段を買う。こうして、部分2は固定資本の損耗分を貨幣化し、貨幣で積み立てることができる。部分1による一方的購買と部分2による一方的販売との均衡が、固定資本の補填のさいの再生産の条件である。

さて、このような固定資本の再生産における貨幣は、どんな独自の規定をうけとるであろうか。

「はじめのほうの部類の資本家は、かつてその創業のさいに

いくらかの貨幣資本を携えて市場にあらわれ、それを一方では不変資本（固定および流動）に転化させ他方で労働力すなわち可変資本に転化させたときと、まったく（または、ここではどちらでもかまわないのだが、部分的に）同じ状態にある。その当時のように、今また彼は再びこの貨幣資本を流通に前貸ししなければならぬ。つまり、不変流動資本や可変資本の価値と同じように固定資本の価値をも流通に前貸ししなければならないのである<sup>(36)</sup>。

ここでは、固定資本の補填のさいの貨幣の前貸は、資本の創業のさいの貨幣資本の前貸と同じことだ、とされている。

年間商品生産物の相互的交換が前提されるばあい、流通に前貸しされる貨幣は、資本として前貸しされるにせよ収入として支出されるにせよただ流通手段としてのみ機能した。そして、交換される商品額のほかに商品転換の手段として流通に投じられる貨幣の前貸は、流通手段の前貸と規定された。ところが、固定資本の補填のさいの貨幣の前貸は、流通手段の前貸ではなく、貨幣資本の前貸と規定されている。その理由と考えられるものは、つぎのとおりである。

一、固定資本の現物補填のさいに投下される貨幣は、固定資本価値の貨幣形態をあらわしており、「現実」に就業する産業資本<sup>(37)</sup>に転化させられる貨幣資本である。「この貨幣は、固定資本の死んだ諸要素を補填するためにそのあらたな諸要素に再転化させられるときに、はじめてその蓄蔵貨幣形態を失うのであ

り、したがって、そのときはじめて再び能動的に、流通によって媒介される資本の再生産過程にはいつて行くのである<sup>(37)</sup>」。このばあいの貨幣は、あらたに資本としての運動を開始する貨幣資本であり、資本の再生産過程の起動力となる。

二、流通手段としての貨幣は、商品価値のほかに商品転換の手段として前貸しされ、商品転換を媒介したのち出発点に還流する。しかし、固定資本の補填のばあい、部分1の前貸した貨幣は部分2の手もとで蓄蔵貨幣に転化され、年間生産物の転換において出発点に還流しない。このことは、部分1は買い手になるが、売り手にはならないことをあらわしている。つまり、部分1は自分のもっている商品価値のほかに商品転換の手段として貨幣を前貸ししたのではなく、固定資本の現物要素の一方的購買のために貨幣資本を前貸したのである<sup>(38)</sup>。部分1に貨幣が還流してくるのは、次年度以後に固定資本の損耗分が商品の販売によって徐々に貨幣で還流するばあいである。

以上のように、固定資本の再生産における貨幣は、商品流通のために追加的に前貸しされる流通手段をあらわすのではなく、あらたに資本としての運動を開始する貨幣資本をあらわすのである。

(35) K. II, s. 448

(36) Ibid. s. 456

(37) Ibid. s. 448

(38) マルクスは、部分1が部門Iから固定資本要素を二〇〇、流動

資本要素をI〇〇買うばあいを仮定して、つぎのようにのべている。

「……部分Iが最初に投下したのはI三〇〇である。すなわち、I三〇〇は固定資本要素の現物をIから買ったときに投下した貨幣であり、I一〇〇はIとの商品交換の媒介のために投下した貨幣である」(Ibid. s. 458)。このばあい、I一〇〇の貨幣は商品交換を媒介したのち還流するが、I二〇〇の貨幣は固定資本の現物要素に転化されるだけで還流しない。

## 二

固定資本の損耗価値部分は除々に貨幣で積み立てられねばならなかったが、これと同じことは、資本蓄積のさいの剰余価値の貨幣での積み立てについてもいえる。貨幣を追加的生産要素に転化させるためには、貨幣が投下される生産部門において資本として機能しうる最低の大きさに達することが必要である。だから、資本蓄積のためには、剰余価値は一定期間のあいだ貨幣で積み立てられねばならない。さらにまた、貨幣を追加資本に転化させるには、追加的生産要素が前もって市場に存在していなければならぬ。

部門Iの資本家Aが剰余生産物をつぎつぎに販売し、貨幣を除々に積み立て潜在的貨幣資本を形成するとすれば、部門Iの資本家Bはすでに追加貨幣資本の形成を終わっており、貨幣を追加的生産資本に転化させている。つまり、資本家Aがたんなる売り手として市場にあらわれるとすれば、資本家Bはたんなる

「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

る買い手として市場にあらわれる。

資本家Aの剰余生産物が生産手段の形態をもっていと仮定すれば、それは、資本家Bの手もとではじめて追加的生産資本として機能しうる。したがって、資本家Bが資本家Aの剰余生産物を貨幣化するための貨幣を供給しなければならぬ。

マルクスは、こうした資本家Bによる資本家Aの剰余生産物の貨幣化のための貨幣の供給について、つぎのようにのべている。

「とはいえ、われわれがすでに単純再生産の考察からも知っているように、IとIIとの資本家たちの剰余生産物を転換するためには、彼らの手のなかにいくらかの貨幣量がなければならぬ。前のばあいには、ただ収入として消費手段に支出されることに役立っただけの貨幣が、資本家たちがめいめいの商品の転換のためにそれを前貸した度合に應じて、彼らの手に帰ってきた。今度も同じ貨幣が再びあらわれるのであるが、しかしその機能は違っている。Aの仲間とBの仲間と(部門I)は、剰余生産物を可能的追加貨幣資本に転化させるための貨幣をかわるがわる供給しあうのであり、また、あらたに形成された貨幣資本を購買手段としてかわるがわる流通に投げ返すのである」<sup>(39)</sup>。

この引用文で注目すべきことは、単純再生産における剰余生産物の転換のための貨幣と、資本家Aの剰余生産物を貨幣化する

る資本家Bの貨幣とでは機能が違ふ、という指摘である。

すでに前節において、部門Iの資本家が収入の支出のために貨幣を前貸しし、その貨幣は商品転換を媒介したのち出発点に還流することをのべた。そして、そのさい貨幣は流通手段としてのみ機能することを明らかにした。ところがマルクスは、拡大再生産においては貨幣の機能が違って、とのべている。

では、資本蓄積のさいの貨幣の機能とは、どのようなものであろうか。

一、資本家Bは、これまでに形成された潜勢的貨幣資本を現実の貨幣資本として追加的生産資本に転化させるために前貸しする。これは、あらたに資本としての運動を開始する貨幣資本をあらわしている。したがって、このばあいの貨幣は、生産過程に投下される資本価値をあらわしている。

二、単純再生産において資本家Iの貨幣は収入として支出され、商品Iと商品IIとの転換の媒介として役立った。そのかぎりでは、資本家Iによる貨幣の前貸は流通手段の前貸と規定された。しかし、資本家Bは商品転換の媒介のために追加的に貨幣を前貸しするのではなく、追加的生産要素の一方的な購入のために貨幣を前貸しするのである。流通手段としての貨幣は、商品転換を媒介したのち出発点に還流するが、Bの前貸しする貨幣は、Aの手もとで潜勢的貨幣資本に転化され、年間再生産においてBのところへ還流しない。このことは、Bの貨幣が商品転換の媒介として機能しているのではなく、あらたに投下され

る貨幣資本として機能していることをあらわしている。資本として投下される貨幣は資本の再生産過程を経てのみ還流するのであり、たんに買い手が売り手になることでは還流しない。資本家Bに貨幣が還流するのは、Bが次年度において商品を生産し販売することによってである。

三、しかし、Bの貨幣はAの剰余生産物の購買手段として機能しており、Bは流通手段を前貸しするのではないか、という反論があるかもしれない。だが、社会的再生産において流通手段の前貸と規定されるのは、商品交換の媒介のために追加的に貨幣を前貸しするばかりだけである。たんに商品の購買のために貨幣を流通に投じることが、流通手段の前貸とはいえない。資本家Bは追加的生産資本に転化させるために追加的貨幣資本を前貸しするのであって、商品交換の媒介のために流通手段を前貸しするのではない。

以上の点から、資本蓄積のさいの貨幣は、商品転換を媒介する流通手段として機能するのではなく、あらたに資本としての運動を開始する貨幣資本として機能する、と考えることができる。

年間商品生産物の相互的交換が前提され、その媒介のために商品資本のほかに貨幣が前貸しされるかぎりでは、その貨幣はただ流通手段としてのみ機能する。それにたいして、年間商品生産物の一方的な変態が必然的であるばあいには、貨幣は貨幣資本として機能する。なぜならば、貨幣は一方的に生産資本に転

化させられるために前貸しされるからである。

「買い手があとから同じ価値額の売り手としてあらわれるということやまたその逆のことによって均衡が回復されるかぎりでは、貨幣の還流は、買うときに貨幣を前貸した側、再び買う前にまず売ったほうの側に向かって、行なわれる。しかし、現実の均衡は、商品転換そのもの、すなわち年間生産物のいろいろな部分の転換にかんしては、互いに転換される諸商品の価値額が相等しいということを条件とするのである。

しかし、たんに一方的な諸転換、すなわち一方の側での多数のたんなる買い、他方の側での多数のたんなる売りが行なわれるかぎり——そしてわれわれが見たように資本主義的基礎の上での年間生産物の正常な転換はこのような一方的な諸変態を必然的にする——、均衡は、ただ、一方的な買いの価値額と一方的な売りの価値額とが一致するという仮定のもとのみ保たれる。商品生産が資本主義的生産の一般的形態だという事実は、すでに、貨幣がたんに流通手段としてだけではなく貨幣資本としてもそこで演ずる役割を含んでいる<sup>(40)</sup>。」

固定資本の補填および資本蓄積のばあいには、商品資本の一部（固定資本の損耗価値部分または剰余価値の資本化部分）は貨幣化されたのち一定期間蓄蔵貨幣形態で積み立てられる。このような貨幣は、商品資本の流通のために前貸しされ、たえず流通に留まっている貨幣とは区別される。固定資本の補填および資本蓄積のさいの貨幣はあらたに生産過程に投下される資本価値を

「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

あらわす貨幣資本であり、商品転換の媒介のために商品資本のほかに前貸しされる流通手段ではない。

(36) K. II, s. 495

(40) Ibid. s. 490-491

### 三

ところで、すでにのべたように固定資本の補填および資本蓄積のさいの貨幣の前貸は「資本の前貸」であるが、社会的生産物の一部の流通に必要な流通手段を供給しており、それゆえ「資本の前貸」も社会的再生産の立場からすれば流通手段の前貸にすぎない、という見解がある。かかる見解は、本節のこれまでの考察からもわかるように重要な問題を含んでいる。

松本久雄氏は、銀行の前貸は、個別資本の立場から流通手段の前貸と資本の前貸とに区別されるが、社会的再生産の立場からすれば、すべて流通手段の前貸にすぎない、と主張しておられる。したがって、「さしあたっての課題は、社会的再生産の見地からはすべて流通手段の前貸にしかすぎない銀行前貸が、いかにして個別諸資本にとって資本の前貸でもありうるか、を説明することである<sup>(41)</sup>」。

氏は、第三部第三章の一節にかんじて、そこでは、銀行による流通手段の前貸の例として、産業資本家が相互的商品交換の媒介のために保有しなければならない貨幣資本の銀行による肩代りが挙げられているが、社会的生産物の流通に必要な流通手段の前貸はそれに限定されない、とのべている。つまり、氏

は、社会的再生産における固定資本の補填および資本蓄積のばあいには、一方的な販売と一方的な購買の関係が生じ、一方的に販売される商品の流通のためにも流通手段が供給されなければならぬ点に注目されたのである。

固定資本の補填および資本蓄積のさいの蓄蔵貨幣は生産過程に投下される資本価値をあらわしているが、「しかし、一方的購買者の蓄蔵貨幣が流通に投ぜられることなしには、一方的販売者の商品価値が実現されなかつたことも事実である。したがってこれらの蓄蔵貨幣が、一定期間は購買手段→流通手段として機能したのであり、そのことによって、社会的総生産物の一部分の価値が実現されたことに変わりはない。

……これが久留間氏のいわゆる『資本の前貸』だろうが、それは同時に社会的総生産物の一部を流通させるのに必要な貨幣の前貸でもあるという意味では、『流通手段の前貸』でもあり、したがって、『社会的再生産の見地』からすれば、流通手段の前貸をはなれては資本の前貸もないことになる<sup>(42)</sup>。

以上のように、氏は、「資本の前貸」も社会的生産物の一部を流通させるために必要な貨幣を前貸しており、したがって社会的再生産の見地からすれば流通手段の前貸にしかすぎない、と論じておられるのである。

氏の見解でもっとも問題となるのは、流通手段の前貸の規定を社会的生産物の購買のために貨幣を流通に投じること、ときわめて一面的にとらえていることである。

一方的な購買者が一方的に販売される商品の購買に貨幣を投じることが、「社会的総生産物の一部を流通させるのに必要な貨幣の前貸でもあるという意味で」流通手段の前貸であるといわれている。だが、流通手段の前貸とは、ただたんに社会的生産物を流通させるために貨幣を流通に投じることの意味しない。第二節でみたように、資本家Ⅰは剰余価値をあらわす生産手段の実現をあてにして、収入の支出のために貨幣を前貸する。この貨幣の前貸は、商品流通の媒介のために商品価値のほかに貨幣を流通に投じることがあらわしており、それゆえ流通手段の前貸と規定される。これにたいして、資本家Ⅱは不変資本価値をあらわす商品Ⅱを実現して、貨幣を生産手段の買い入れに前貸するが、この貨幣の前貸は、流通手段の前貸とは規定されない。というのは、資本家Ⅱはこのばあい商品価値Ⅱの貨幣形態を流通に投じるだけであり、商品価値のほかに貨幣を流通に前貸するわけではないからである。このばあいにおいても、資本家Ⅱは社会的生産物の流通のために貨幣を前貸したということもできるであろう。もし、資本家Ⅱが貨幣を流通に投じなければ、資本家Ⅰの生産物は流通できないからである。しかし、このばあい商品Ⅰと商品Ⅱとの交換の媒介に必要な貨幣を自分の財源で負担したのは資本家Ⅰであり、資本家Ⅰだけが社会的生産物の流通の媒介に必要な貨幣を前貸したといえる。したがって、たんに社会的生産物の購買のために貨幣を流通に投じるとは、流通手段を前貸したことにほならぬ

い。

松本氏のいう「社会的総生産物の一部を流通させるのに必要な貨幣の前貸」とは、たんに社会的生産物の流通（購買）に貨幣を投じることしか意味しておらず、そのことじたいは流通手段の前貸とはいえない。それゆえ「資本の前貸」を、社会的再生産の立場からみて、流通手段の前貸ということはできない。

では、なぜ固定資本の補填および資本蓄積のさいの貨幣の前貸は、社会的再生産の立場からみて、資本の前貸と規定されるのであろうか。

資本家Ⅱが不変資本価値をあらわす商品の実現をあてにして、生産手段の買入れに貨幣資本を前貸しするばあい、この貨幣資本の前貸は、社会的生産の立場からみて、同時に流通手段の前貸である。なぜならば、この貨幣資本は商品Ⅰと商品Ⅱとの交換の媒介としてのみ機能し、社会的再生産において資本として運動するわけではないからである。W—G—Wの媒介の形態としての貨幣資本は、流通手段としてのみあらわれる。このような貨幣資本の銀行による前貸は、流通手段の前貸と規定される。

これにたいして、固定資本の補填および資本蓄積のさいの貨幣は、あらたに資本の運動を開始する起動力としての貨幣資本であり、資本の再生産過程の出発点である。社会的再生産において年間生産物の相互的転換が前提されるかぎり、貨幣は流通手段としてあらわれる。しかし、年間生産物の一方的転換に

「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

においては貨幣は生産資本に転化される。このばあい貨幣は「現実」に就業する産業資本」に転化されるのであり、このような貨幣の銀行による前貸は資本の前貸と規定される。<sup>(43)</sup>

社会的総資本を構成する個別資本は、商品資本の流通の媒介のために、生産資本のほかに手もとに準備している貨幣資本を前貸する。<sup>(44)</sup>この貨幣資本は買い手が売り手になることで出発点に還流し、ただ流通手段としてのみ機能する。しかし、固定資本の補填および資本蓄積のばあいには、一方的な販売と一方的な購買が行なわれ、貨幣はW—G—Wの媒介としてはあらわれない。そのさい貨幣は再生産過程の起動力として前貸しされるのであって、商品転換の媒介のために前貸されるのではない。たんに生産要素の一方的購買に投じられる貨幣は、資本として前貸しされる。

以上のように社会的再生産において、商品交換の媒介のための流通手段の前貸と、現実」に生産資本に転化される資本の前貸との区別が、もっともよく示されるのである。

(41) 松本、前掲論文、四〇ページ。

(42) 松本、前掲論文、四二ページ。

(43) 銀行による資本の前貸の例。

「たとえば、Aは、事業を始めるためかまたは一年間続けて行くための生産資本の一部分を銀行家Cから借り入れる。彼は、事業を経営して行くために十分な自分自身の資本を、はじめからもってはいないのである。銀行家CはAにある金額を貸すのであるが、それ

## 「再生産論」における貨幣の前貸と還流について

は、Cに預けられた産業家D、E、F、等々の剰余価値から成って  
いるにすぎない」(K. II, s. 322)。

(44) マルクスは商品資本の流通のための貨幣準備について、つぎの  
ようにのべている。

「部門Ⅱの一資本家が、生産資本のほかに自分の手もとにある貨  
幣資本のうちから、部門Ⅰの資本家たちのもとで生産手段を買うこ  
ともありうるし、反対に部門Ⅰの一資本家が、資本支出ではなく個  
人的支出のための貨幣財源のうちから、部門Ⅱの資本家たちのもと  
で消費手段を買うこともありうる。いくらかの貨幣準備は——資本  
前貸のためであるうと収入支出のためであるうと——、すでに第一  
篇と第二篇で明らかにしたように、どんな事情のもとでも生産資本  
と並んで資本家の手もとにあるものとして前提されなければならない  
」(Ibid. s. 399)。

(一九八〇年一〇月一日)